**受難節第５主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年３月17日**

**「悔い改め」**

**ヨナ書３章1～10節**

**3:1 主の言葉が再びヨナに臨んだ。**

 **3:2 「さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。」**

 **3:3 ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。**

 **3:4 ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」**

 **3:5 すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。**

 **3:6 このことがニネベの王に伝えられると、王は王座から立ち上がって王衣を脱ぎ捨て、粗布をまとって灰の上に座し、**

 **3:7 王と大臣たちの名によって布告を出し、ニネベに断食を命じた。「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ食物を口にしてはならない。食べることも、水を飲むことも禁ずる。**

 **3:8 人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのおの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。**

 **3:9 そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」**

 **3:10 神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくだすのをやめられた。**

**マタイによる福音書12章41節**

**12:41 ニネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。**

**私たち主の日の礼拝で共に使徒言行録から御言葉を聞いてきました。12章まで読み進めていきました。使徒言行録は12章までがいわば第一部でありまして、13章からが第2部にあたります。それまでユダヤ人だけに向けた伝道から異邦人に、さらに言えば世界中の人々への伝道に大きく舵を切った教会が、いよいよサウロとバルナバを伝道者として立てて伝道旅行を始めていくのです。イエス・キリストの福音が世界中に広がっていくのです。**

**異邦人コルネリウスの回心の物語は実はペトロの回心の物語だと言いました。神様はユダヤ人も異邦人も分け隔てなく愛して下さり、独り子イエス様を全ての人の救い主として与えて下さった。実はそのとっても大切なことに気づかされたのはペトロの方だったのです。そして、最初はペトロが異邦人に洗礼を授け一緒に食事をしたことを批判していた教会もこれが神様の大いなる愛の業であることに気づかされて讃美をしました。いわば教会も回心したのです。**

**教会の回心って言葉としておかしな言葉かもしれませんが、神様の御心を常に祈り求めて歩む教会が自分たち人間の思いで凝り固まっているようなことがあれば、教会の姿としておかしな姿になってしまいます。今神様が何をなさろうとしておられるのかを御心を問いつつ、自分たちの歩みが違う方向に行っていると気づかされたなら常に軌道修正をする、いわば回心であり、悔い改めるのです。教会こそが悔い改めて、この地上での与えられた大切な使命を果たしていく、そのような大切な務めを神様から与えられているのです。**

**それとは反対にヘロデ王は回心しなかったのです。悔い改めなかったのです。回心することなく、悔い改めることなく、さらには神に栄光を帰すことなく、自分自身に栄光を帰したのです。そのために神様から撃たれてしまったのです。**

**今私たちはレントの時を歩んでいます。それは先ほど悔い改めの讃美歌を歌いましたが、悔い改めの日々を送るのです。常に主に立ち帰り、自らの罪を思い、その罪のために十字架に掛かってくださったイエス様の御苦しみを覚える時を過ごしているのです。**

**その悔い改めの日々を送る私たちにこの朝与えられた聖書の箇所は、旧約聖書ヨナ書3章のニネベの人々の悔い改めが記されているところです。第5主日に読み進めていたヨナ書が様々な事情で2章までしか進めていませんでしたので、使徒言行録が第2部に入る前に、本日はヨナ書の3章を共に読んで御言葉に耳を傾けたいと思います。**

**神様からニネベの都に行くように言われた預言者ヨナでしたが、神様から逃げて反対方向のタルシシュ行きの船に乗りました。しかし、神様が嵐を起こされて、船は転覆しそうになり、ヨナは荒れ狂う海に投げ込まれました。三日三晩魚のお腹にいたヨナは神様に祈りました。「救いは主にこそある」ヨナの悔い改めでした。神様から逃げていたヨナが神様に立ち帰ったのです。神様はそのようなヨナを再び神の言葉を語る預言者として用いられたのでした。今度はヨナは「直ちに」ニネベに向かいました。そして「あと40日すれば、ニネベの都は滅びる」と神様から語られたことをそのまま伝えました。**

**すると驚くことに、悪に満ちた大いなる都であるニネベの人々がヨナの説教を聞いて、王様から身分の高い人も低い人も、さらには家畜に至るまで悔い改めたことと記されてあるのです。５節には「するとニネベの人々は神を信じ」とあります。悪に満ち天地の造り主から離れて他の神々を信仰していたであろう、異邦人の街ニネベの人たちがヨナの説教を聞いて、主なる神様を信じて主なる神様に立ち帰ったのです。**

**ヨナはニネベの人たち全員を悔い改めさせるような名説教をしたのでしょうか。ニネベの人口は12万人以上です。その12万人以上の人々が悔い改めるような熱狂的な心揺さぶる説教をしたのでしょうか。**

**決してそうではありません。ヨナはただ神の言葉をそのまま言われたとおりに語っただけです。「あと40日すれば、ニネベの都は滅びる。」（4節）「だから悔い改めなさい」と言ったわけではありません。「今すぐにその悪を離れて主なる神に立ち帰りなさい」と言ったわけでもありません。「あと40日すれば、ニネベの都は滅びる。」誰にでも言えそうなことです。名説教でも熱狂的な説教でも何でもない。ただ神の言葉を語っただけですが、ニネベの人たちはまさにこれが神様の言葉であると心から信じて悔い改めたのです。**

**その彼らの姿は本当に必死です。断食をし、粗布をまとい、灰の上に座しました。王は町の人々に布告を出しました。7～9節です。**

**「3:7 王と大臣たちの名によって布告を出し、ニネベに断食を命じた。「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ食物を口にしてはならない。食べることも、水を飲むことも禁ずる。**

**3:8 人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのおの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。**

**3:9 そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」**

**自分たちは悪を離れて神に立ち帰りひたすら祈る。そうすればもしかしたら神様はこの町を滅ぼそうというお考えを思い直して下さり、私たちは滅ぼされずにすむかもしれない。彼らの悔い改めの判断の主体は神様です。私たちは悔い改めました。だから神様滅ぼさないでくださいよ。約束を守って下さいよ。さらに言えば悔い改めた私たちを助けないのはおかしい！と自分たちが主になるのでなく、「もしかしたら考え直してくださるかもしれない」とあくまでも判断されるのは神様であり、神様にお任せをしてお委ねしたのです。それが彼らの悔い改めであり、謙虚な信仰の姿なのです。**

**イエス様もマタイによる福音書でニネベの人たちの姿を褒めておられます。その悔い改めの姿はヨナに勝るとまで言われています。神様に精一杯立ち帰り、謙虚で謙遜なニネベの人たちの姿です。その姿を神様はご覧になられてどう判断されたでしょうか。**

**「3:10 神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくだすのをやめられた。」**

**神様はニネベの人たちの神様にご判断をお委ねして真剣に悔い改めるそのお姿をしっかりと御覧になられました。そうして、なんと滅ぼす考えを思い直されました。「あと40日すればニネベの都は滅びる」とヨナを通してニネベの人たちに宣言した神様なのですが、まるで振り上げたこぶしを降ろすかのようにニネベの人たちが必死に悔い改める姿を御覧になられて滅ぼす考えを思い直して下さったのです。**

**「思い直す神」これがヨナ書が語る神様の姿です。そんなことがあるのだろうかと思われるかもしれません。けれども、神様は一度滅ぼすと決めたことをたとえどんなことがあってもその意思を曲げることなく滅ぼすお方なのではありません。思い直して下さり、その決断を変えて下さるのです。じゃあ、反対に私たち人間の思いや行動で判断が揺れ動くような意志の弱い気まぐれなお方なのでしょうか。**

**毎週木曜日に行われている聖書研究祈祷会では創世記の1章から聖書の学びを始めました。「初めに神は天地を創造された」「光あれ」神様がこの世界を愛をもって造ってくださった。そこから聖書は記されてあります。神様は人をつくられた時、神様に似る者として造ってくださいました。アダムとエバが食べてはいけないと言われた木の実を食べてしまい神様から隠れてしまったときに「どこにいるのか」と必死になって探して、「なんということをしたのか」怒りとも悲しみともとれることを言われました。その後人々が神様から離れ好き勝手に生きてこの地上に悪がはびこった時、神様は大洪水を起こされてノアと家族以外を滅ぼされました。神様はノアに「もう二度と滅ぼすことはすまい」と約束をして下さいました。その後人は増えて世界中に広がっていきました。神様から離れて生きていく人たちが多くなりました。その中で神様はアブラハムを選ばれて「あなたを大いなる国民にする。あなたの子孫は天の星のように増える」と約束して下さいました。**

**そうして先日の木曜日は18章まで進み、神様が3人の旅人の姿でアブラハムの前に現れて、ソドムとゴモラの街が邪悪で罪に満ちているから調べに行くと言われました。アブラハムは「もし正しい人が50人いても滅ぼされるのですか」とソドムとゴモラの人々のために執り成しました。45人だったら、40人だったら、30人だったら、20人だったら、もしかしたら10人しかいないかもしれませんと、アブラハムが必死に神様に食らいつく姿に神様はどこまでも「その人数だったら滅ぼさない」と真剣に向き合ってくださいました。**

**こうして改めて創世記1章から神様の姿を読み進めたとき、神様というお方は本当に私たち人間を愛しこの世界を愛して下さっているお方であることを改めて思わされています。神様なのですから、天の上の方で高みの見物をして、「人間はどうしようもないな」とあきれていてもおかしくないと思うのです。でも聖書の神様はそんな神様ではありません。時に歩き回り、時に怒り、時に悲しみ、時に人間の姿になりご自身が作られた人間の前に現れて下さるのです。こんな言い方をしたら神様に失礼になってしまうかもしれませんが、ある意味人間臭い神様なのです。**

**ご自分がつくられた世界です。ご自分がつくられた人間です。誰が滅んでほしいと思うでしょうか。愛して下さっているのです。誰一人として滅んでほしくないのです。愛して下さっているからこそ、私たち人間と真剣に向き合って下さるのです。アブラハムの執拗な執り成しにどこまでも付き合って下さったように、どこまでも私たちを愛して下さり深く憐れんで下さるのです。愛して下さっているからこそ、ご自身のご計画を思い直して滅ぼすことをやめることもあるのです。ご自身のご計画を思い直してまでも、罪深い私たちへの愛を現わして下さるのです。**

**「思い直す神」この「思い直す」の言葉が旧約聖書の元の言葉であるヘブライ語では「悔い改める」と同じ言葉なのです。そしてこの「思い直す」「悔い改める」の意味を持つこの言葉はさらに意味があって、それが「憐れむ」という意味なのです。**

**ですから「思い直す神」というのは「憐れむ神」なのです。私たちを憐れんで下さるお方がこの世界をそして私たちをつくってくださった神様なのです。私たちの誰一人として神様から離れてしまって、滅んでほしくないのです。その究極の憐れみの姿が十字架の死です。神様ご自身が自ら十字架で死んでくださった。血を流して下さった。そこまでして私たちを憐れみ愛して下さる神様の愛を思うと私たちはその神様に日々立ち帰り、感謝と畏れを持って悔い改めるしかないのではと思います。**

**「憐れむ神」私たちはこの朝改めて神様の愛に感謝をし、イエス様の十字架に思いを寄せてこの週も歩んでいきましょう。**